



Vol.31 2012年5月1日  
会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

◆ 会員からの報告

**作り手に求められる経験と勘**

井戸健二 (株式会社東芝 デザインセンター)

近年、デザインに対して人間特性に則した科学的な根拠が以前にも増して求められるようになり、私たちの出番も増えてきています。利用者不在のモノ作りから脱却して、デザインの意味が厳しく問われるようになったことは喜ばしいことです。人間工学専門家は、これまで以上にデザインを科学の視点で分析・提案する能力を磨かなければなりません。しかしその一方でモノ作りの現場ではデータへの依存度が増し、「経験と勘」という言葉が軽んじられている傾向があるようにも思います。もちろん、評価実験などを通して定量的にデザインの仕様を定めてゆくことは重要ですが、実際にモノが現実世界で使われる状況は極めて多様であり、実験や評価によって得られたデータがそのまま適用できるケースは、その多様な使用状況の中のほんの一部にしか過ぎません。たとえば何か手に持って使う道具を評価するという実験を例にしてみても、その使い勝手を定量化する手法は、パフォーマンス計測や、利用者の筋負担や動作の解析、道具の加速度計測などいろいろと考えられますが、ここから得られた定量値に妥当性を持たせるためには、タスクの規定や統制が必要になります。つまり多様な使用状況を絞り込んでいるということです。多様な使用状況すべてを評価することはできません。だから既知の事実や実験等で得られたデータを、様々な使用状況と照らし合わせて、多角的に解釈してモノに落とし込む能力が、作り手にとっては重要になってきます。人間の特性や多様性に関する十分な知識を持って、常に利用者のことを深く考えている作り手が経験を重ねて体得した勘というものは、ただの思い付きとはまったく異なる、高次の情報統合力であると私は考えています。だから「経験と勘」という言葉が使われるときにはその文脈に注意しなければいけま

せん。デザインの現場では、評価や調査のための十分な時間が常にあるとは限りませんし、よりスピーディーな意思決定が求められることもあります。このようなときこそ精度の高い「勘」が求められるときではないでしょうか。モノ作りに対する科学の視点と、日々人間と向き合う経験に基づいた的確な勘。この両輪が人間工学専門家だけでなく、作り手には求められると思います。

**執筆者自己紹介**

井戸健二:1997年千葉大学大学院工学研究科工業意匠学専攻博士前期課程修了。同年(株)東芝入社。同社デザインセンターにて人間工学に基づくデザイン提案・評価などに従事。

◆ 会員からの報告

**私の仕事の紹介 マーケティングへの人間工学の応用**

三井一志 (株式会社エルネット/

大阪ガス行動観察研究所)

こんにちは。エルネット/大阪ガス行動観察研究所の三井です。この度、CPEの仲間入りをさせていただきました。

私の現在の仕事と人間工学の関係についてお話しします。

現在は、人間工学を取り入れたマーケティングの仕事をしています。具体的には、行動観察をしています。行動観察とは、文字通り人の行動を観察し、分析することです。学術分野での行動観察はここまでです。我々が実践している行動観察は、観察結果を踏まえて、課題に対する改善案を提案・実施したり、運用方法を考えたり、それらをマニュアルや研修、基礎資料といったものにするなど、ハードソフトを問わず、ものづくりをしています。行動観察のステップを簡単にご紹介します(図1参照)。



図1. 行動観察のSTEP

**STEP1:データ収集**

実際に対象現場に入り、課題に関連する事実情報を収集します。

**STEP2:データ分析**

案件により異なりますが、人間工学や心理学と言った、学術的な視点を交えながら、STEP1で得られたデータを分析します。

### STEP3:ソリューション開発

分析結果をもとに、クライアントと、課題に対するソリューションを考えます。

我々が扱うテーマの中には、クラシカルな人間工学の領域である身体適合性に関するものや、心理学の知見が必要なものなど多岐にわたります。

行動観察をするためには、人間の特性や傾向がわかっている必要があります。しかし、それだけや自身の経験のみで観察すると、大切なことを見失ってしまう可能性があるため注意が必要です。

人間は見えるものしかみえません。ある事象に対して仮説があれば、それに関する事実しか見えないといっても過言ではありません。ですので、我々は仮説を持たずに観察します。とはいえ、全く無知で調査に行くと、課題解決につながる事実が収集できないことが懸念されるので、何を見れば良いかの観点はあらかじめ決めて観察します。

私は、行動観察は、ものづくりの上流で人間工学を活用するための一手法と考え、日々の業務に励んでいます。

行動観察が適用できるフィールドは、人が介すること全てです。色々な制約により観察したくてもできないフィールドはありますが・・・。

皆さんも、ご自身のフィールドで、行動観察をされてみてはいかがでしょうか？今まで気付かなかった事に気付くかもしれません。

#### 執筆者自己紹介

三井一志:信州大学大学院修了後、機械メーカーに就職。開発設計を担当しているときに、行動観察手法を用いて製品の研究開発を行う。その後、利用者の感性を商品に反映させるための研究活動に従事。現在は、株式会社エルネットで行動観察手法を用いた調査業務に従事している。

#### 報告

### 平成 24 年度 総会・講演会

4月19日(木)、中央大学駿河台記念館にて、平成24年度総会・講演会が開催されました。

冒頭で、日本人間工学会の斉藤進理事長から、初代の人間工学専門家認定機構長をされた藤田祐志氏が、本年2月に国際人間工学連合(IEA)副会長として選出されたという嬉しいご報告があり、その後、お二人の方に、ご講演いただきました。

一件目の日産自動車(株)伊藤一也氏からは、「生涯現役な専門家を目指して」というタイトルで、ご自身の業

務を振り返りつつ、今後の人間工学専門家としての活動について、ご発表いただきました。

続いて、シャープ(株)の倉持淳子氏からは、「使ってみたいモノづくり」と題し、デジタル家電におけるユーザビリティの定義など、シャープでのユーザー・センター・ドデザイン活動についてご紹介いただきました。

講演会の参加者は、合計40人(一般11人を含む)となり、盛況な会となりました。ご講演の内容は、次号の会報において、詳細を報告する予定です。

総会では、平成23年度の事業報告と収支決算・監査報告、および平成24年度の事業計画案と予算案が承認されました。平成24年度の事業計画案として、機構ホームページのリニューアル、人間工学グッドプラクティスデータベースの作成、IEA専門家教育委員会への協力、他学会などとの連携などが、承認されました。

また、第5期人間工学専門家認定機構長選挙が実施され、立候補者の日本アイ・ビー・エム(株)吉武良治氏が信任されました。

(報告:永野行記)

\*\*\*\*\*

### ●認定人間工学専門家の新規登録

新たに準専門家、アシスタントとして認定された方々をご紹介します。(敬称略)

【認定人間工学準専門家】

(2月1日認定) 乾翔悟

【認定人間工学アシスタント】

(2月1日認定) 青柳鎮一郎、小笠原純、岡本裕、小玉定弘、佐々木祐輝、竹田正義、得能友彰、花田郁也

\*\*\*\*\*

### ○会報バックナンバー

<http://www.ergonomics.jp/product/newsletter.html>

### ○会報、編集委員会へのご意見、情報提供は

e-mail : [cpnewsletter@ergonomics.jp](mailto:cpnewsletter@ergonomics.jp)

〒107-0052 東京都港区赤坂 2-10-16 赤坂スクエアビル 2F

日本人間工学会事務局

会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

【編集委員会メンバー】

松本啓太(編集委員長)、青木和夫、城戸恵美子、斉藤進、永野行記、藤田祐志、吉武良治